

e-dream-s通信

e-dream-s ホームページ <http://www.e-dream-s.org>

No.22 発行：2002年4月14日 特定非営利活動法人 イー・ドリームズ

タスクプロジェクト報告会を終えて・・・新たなスタートへ！

桜も終わり、新緑の季節を迎えようとしています。3月末には、タスクプロジェクトの報告会が東京で行われました。様々なタスクに取り組んだ報告を聞き、また、議論をする中で、私たち e-dream-s の活動の意義や今後の方向性も見えてきました。e-dream-s の活動は、これからも、さらに発展させていかなければなりません。新たな気持ちで、また新たなタスクに挑戦しましょう。

- 目次
1. [隣のジュンク堂](#) 辻荘一 (p1)
 2. [写真の愉しみ：構図とディテール](#) 井川好二 (p3)
 3. [タスク報告会に参加して](#) 中川房代 (p6)
 4. [ソウル、東京、大阪](#) 塚本美紀 (p8)
 5. [ペナン&ランカウイのバカンス](#) 山田昌子 (p10)
 6. [タスクプロジェクト報告会終了](#) 小関静枝 (p14)
 7. [タスク報告会を終えて](#) 阿部武司 (p15)

隣のジュンク堂

辻 荘 一

私にとって近所の本屋は用があってもなくても取りあえず立ち寄ってしまうところだ。

近所の本屋はどれも大した品揃えはないし、いつものところにいつもの雑誌やベストセラーが置いてあるだけ、大型書店とは比べものにならないと知っているのについ立ち寄ってしまう。まず、新刊マンガの平積みをさっと見て、次にゆっくり歩きながら

マンガの棚にざっと目を走らせる。それから、新刊書を一応見て、雑誌の棚にまわる。前日同じ本屋に来て同じように見て回ったばかりで、大した変化があるはずはないと知りつつ二日連続で来ることもある。もっとも肝心の探している本はなかったりする。近くに紀伊国屋とかジュンク堂などの大型書店があればいいんだがと詮ないことを考えたりする。

@aglance の目標はとりあえず、肝心の本が見つかる近所の本屋だ。つまり用があるときはちゃんと期待通りに用事が済むし、用がなくてもつい毎日来てしまうようなサイトになることだ。

期待に応えられるサイトというのは、教育用写真アーカイブとして優れているということだ。それには一にも二にも枚数である。2002年4月13日現在で1110枚だが、まだまだだ。種類も欲しいし、利用例を示したりすることも大事だがとにかく、その基礎となるのは枚数だ。幸い@aglance には他の画像サイトには例のない優れた検索エンジンと丁寧なキャプションを装備済みだ。枚数さえ増えれば世界に例のないサイトになるだろう。

次に大事なものは、用がなくてもつい来てしまうサイトであることだ。要するにそれだけの魅力がなければならぬのである。浜崎あゆみファンは放って置いても浜崎あゆみのサイトに来るだろうが、残念ながら e-dream-s は知名度・人気ともに浜崎あゆみには少しだけ負けているので、毎日立ち寄ってもらうためには、それなりの努力がいる。今のところ答えはひとつ、「毎日更新」だ。毎日来ても必ず何かしら変化がある、どこか新しくなっていると思えばつい来てしまうというわけだ。「今日の一言」や「今日の新作写真」はそのための企画だ。もちろん「今日の一言」はバックナンバーと一緒に読めば、@aglance の内容や姿勢が詳しく分かるように考えては書いているが、今は内容はとにかく毎日更新に意味があると考えている。

さて、@aglance は e-dream-s 会員にとって用がなくても立ち寄るサイトになっているだろうか？ 会員にとって魅力がなければ、他の人にアピールするはずがないからね。なに、まだアナログ回線でインターネット接続が面倒？ すぐに電話しなさい、すぐに！

[目次](#)

写真の愉しみ：構図とディテール

井川好二

眼が悪いので、写真を撮るのは苦手である。撮るとどれもピンボケになる。見かけに寄らず Shy な性格が災いして、写真に撮られるのもあまり好きではない。撮ってもらった写真を見ると、変に構えていて自分らしくない。自意識過剰と、人は云う。

そんな私だが、良い写真を見るのは好きである。流れていく瞬間が、切り取られて静止している。2次元の平面に、3次元の空間が息づいている。人物や風景がふと見せる煌めきが伝わってくる。優れた写真とは、時間や空間を超えて語りかけてくるものなのだろう。

e-dream-s の写真アーカイブ @aglance の掲載写真の数が 1000 枚を越えたのは、誠に喜ばしい。(2002年4月12日現在; 1,105枚) もちろん、さらなる量的拡大を図ることが、緊急の課題であろう。当面の目標は、10万枚。こんな写真、あんな写真が欲しい、と言う欲張りな教室現場のリクエストに、余裕で応えられるサイトを目指さなければならない。蓋し、数は力である。

一方、質も大切。小学校から大学まで、言語教育から異文化教育、地理、歴史、理科、国語と、様々な科目の授業で使える内容の充実が望まれる。どんな写真が授業で使えるのかは、実践報告を待たなければならない。写真を実際に使った授業をして、こういう授業には、こういう写真と言うガイドラインが確立されることを待たなければならない。

今回は、現在アップされている写真の中から、これは面白いと思えるものを、いくつか挙げてみたい。無論、私見ある。つまり、授業で試した訳ではないし、多分に個人的な興味に流された選択であると思うが、個人が面白いと思うところからしか、授業での活用もないとも云える。

尤も、写真は、私の専門ではない。敢えて云えば、私は、異文化教育の専門家である。その

私の眼で見て、面白く、授業で使えそうな写真を、以下に紹介し、その理由を解説したい。今回は、数が多く質的にも充実している中国の写真に話を限定し、3人の ACROSS 写真家の作品を紹介する。

蛇足を付け加えれば、@aglance には、他にも優れた中国写真がたくさんある。今回は紙面の都合で、3人の作品に限って話を進める。他の作品の紹介は、次回以降に、乞うご期待。

更に付け加えると、自然の美しさや名所旧跡にさほど興味のない私が選ぶと、どうしても人々の生活や表情が、シャープに取り込まれた写真ばかり選んでいることが分かる。となると、選択のポイントは、その構図とシャッターチャンス。何をどの瞬間に？つまり、コンテクストを含めた被写体が見せる、どの表情を写し取るかの問題なのである。

まず、河野良子の作品である。

(1) c006 中国蘇州：蘇州の水郷蘇州市内の水郷に行く舟と家並 (1992/8)

(2) c008-中国上海：上海市内の街角-上海市内の露店で出勤途中、朝食を買い求める市民 (1992/8)



蘇州の水郷
蘇州市内の水郷に行く舟と家並

© 1992/8



上海市内の街角
上海市内の露店で出勤途中、朝食を買い求める市民

© 1992/8

(1) 水辺に暮らす人々の生活が窺い知れる一枚である。家並みが写る河面を、舟が何ともゆったりと動いているのが分かる。よく見ると、家の地階部分が、段違いの石造り耐水構造になっているところが、当たり前だが面白い。こういう文化的ディテールがクリアに見える写真が楽しい。

(2) 出勤途上に朝食を買い求める上海市民と売り手の表情が、生き生きと伝わってくる一

枚である。このパンのように見える食べ物はどんな味がするのだろうか？時間に余裕がなく、お金を払う準備をして「早よせい」モードの勤め人たちと、朝から暑さにドラッと構える朝食屋グループのコントラスト。社会階層の違いがクッキリでている。それに、真ん中のサングラスの女性は、白人のようにも見えるのだが...

次に、塚本美紀の作品を紹介する。

(3) c091-中国大連：路上散髪屋さん-大連市内の路上にある理髪店で、髪を切ってもらおう人。(1993/8)

(4) c079-中国北京：胡弓を弾く男性-北京市内の公園で、胡弓の練習をする。(1993/8)



路上散髪屋さん。大連市内の路上にある理髪店で、髪を切ってもらおう人。 © 1993/8



胡弓を弾く男性。北京市内の公園で、胡弓の練習をする。 © 1993/8

(3) 舗道で営業する大連の路上散髪屋は、何とも愉快である。女性理髪師の左足の伸び具合と、神妙に椅子に腰掛けた中年男性と、その刈られた髪が舗道に散らかっている様が、リアルである。側のベンチに憩うおばさん達の楽しそうな表情もご愛敬である。

(4) 公園のベンチに座って胡弓を弾く男性は、不思議な表情をしている。中国の伝統的なミュージシャンがどんな顔をしているのか定かではないが、酷暑の北京、涼しげな木陰で、ちょっと一曲腕試しのように見えるこの男性の顔は面白い。中国の住宅事情、伝統への姿勢などを窺わせる一枚である。

最後は、山田昌子の作品である。

(5) c001-中国上海：上海市内の市場-早朝からにぎわう上海の青空市場(8/1992)

(6) c002-中国上海近郊：上海近郊の服飾工場・上海近郊の郷鎮企業で日本向けの背広の縫製工場働く人々(1992/8)



上海市内の朝市
早朝から夕方まで上海の青空市場



上海近郊の製服工場
上海北郊の製服工場で日本向けの着江の縫製工場で働く人々

(5) 上海市内の朝市の写真であるが、映画のセットのように、どこか嘘くさい。路上に並べられた野菜もリアルに見えるし、物売りの表情も面白い。ちなみに、話しながら歩いていく二人は、日本人の知り合いのFとTに見えるのだが...

(6) 山田は、こういったお仕事風景を、さりげなく写真に収めるのが得意らしい。懸命に背広を加工する女性とそのコンテクストが、はっきり写し取られていて迫力がある。ユニクロをはじめ日本のアパレル・メーカーの中国進出が、大きく報じられる昨今、その原型がここにある。

重ねて言えば、写真の愉しさは、その構図とディテールにある。切り取った空間と瞬間の表情である。(Saturday, April 13, 2002)

[目次](#)

タスク報告会に参加して

中川 房代

3月28日に東京で開かれた「タスク報告会」に参加した。9月中旬から e-dream-s の仕事に関してお休みを頂いていたので、約半年ぶりのイベント参加となった。8月の定時総会で提案した「タスク」の月々の進捗状況については、これまで事務局の小関さんからや「e-dream-s 通信」の原稿で概要は目にしていたが、タスクをしてきた会員から直接話を聞

くのは初めてだったので、楽しみにしていた。

会では、それぞれのタスクグループの代表者から報告があった。詳しいことは事務局からの報告にお任せすることにして、ここでは私の感じたことを書くことにする。

1 つめは、報告の中で面白く感じたのは、自分で工夫してタスクを実行した会員の感想であった。たとえば、私たちの写真アーカイブズに写真を提供してもらえるインターネットのサイトを捜し続けた会員は、写真の説明が書かれているものが極端に少ないこと、提供の願いをしても返事をもらえるのには時間がかかったこと、インターネットの回線が遅いので写真を見るのに時間が掛かったこと、などを述べていた。自分で経験したことの中から得られる言葉は重みがあり、興味深かった。実際にそのタスクに携わった人にしか得られないからであるが、報告会を通じて、参加者とも共有できたのがよかったと思う。

2 つめは、個人のネットワークを作っていくこと、強めていくことが今後の e-dream-s にとって大事だということである。このタスク報告の中で、今後発展させていけそうなものがたくさんあるぞと感じた。今回作った個人のネットワークはこれからも継続していきたい。もっと強めていきたいものもある。このネットワークこそが私たちの財産になっていくのではないかと思う。

3 つめは、先日正式オープンした私たちの写真アーカイブズを広く世界に知らせていく広報活動に力を入れていきたいということである。同時に、今回のタスクは写真アーカイブズに関わるものが多かったが、その成果を生かしていきたい。報告会のまとめの中でも言われていたが、実際に使ってみてのその結果で、もっとよりよいものへと改善していきたい。

桜満開の中で開かれた報告会は、今後の e-dream-s の進むべき方向性を見せてくれた気がする。設立 3 年目をどうしていくか。e-dream-s の任務への復帰とともに、しっかりと考えていきたい。

ソウル、東京、大阪

三都物語、というより地球村物語

塚本美紀

外国語学部で学ぶ大学生だった80年代の半ばに読んだ日米のコミュニケーションスタイルについての本、“Public and Private Self in Japan and the United States”^{*}の中で初めて、a Global Villageという言葉を目にした。この本の中で著者は、近い未来、我々は異なる言葉話し、異なる価値観を追求し、異なるペースで生活する隣人と生活することになり、そのような地球村は技術的に実現可能であることに疑問の余地はない、と述べている。当時の私は、「地球村」という実感はなく、遠い未来のこのように思えた。その頃母校では、毎年夏になるとハワイ大学からアメリカ人のB教授がみえて、「コミュニケーション論」の講座が開かれていた。彼はよく「米英学科の君たちは、ついアメリカの方ばかり向いてしまうが、一番近い国、韓国のことを知らなさ過ぎる。ハワイに来るよりもずっと短時間でしかも少ない費用で、たくさんの方が学べるのに。」と言っていた。このことは、私の心にずっと引っかかっていたのだが、これまで訪れたのは西洋の国々やアジアの中でも少し離れた東南アジアの国々。私にとって韓国はいつまでも「近くて遠い国」だった。しかし先月の中旬、新たな気持ちで新年度を始めるために、一泊で国境を超える旅を試してみるのもいいかもしれないと、急遽思い立って、週末をソウルで過ごすことにした。

旅立つ日の朝、NHKニュースを見ながらクロワッサンを頬張っていた私は、数時間後オンドルの部屋で、片膝立ててカルビを焼くオモニや、うどんのような麺類を食べるサラリーマン風の人達に囲まれて、OBビールを飲みながら辛子味噌をたっぷりのせた石焼ビビンバを食べていた。現地ガイドと雑談をしていて、九州と韓国がいかに近いかという話になった。私の住んでいる福岡県の海岸では、時々ハングル文字の印刷されたシャンプーの空容器を見ることがある。そのことを彼女に告げると彼女は、「韓国が迷惑をかけてるんですね。恥ずかしい。」と苦笑いした。「きっと日本からもたくさんごみが韓国に流れていってるだろうから、お互い様ですよ。こちらこそ、ごめんなさい。」と私は言った。こんなことを話していると、本当に韓国は「お隣」なのだと思う。

帰国後、年度末の仕事をなんとか片付け、慌しく東京へ向かった。e-dream-sのタスク報告会に出席するためだ。会場の練馬に向かう途中、学生時代に上京した際、友人と原宿を歩い

たりしたことを思い出して、原宿で途中下車した。子供達がたくさん集まっている所とは反対側に歩いていると、明治神宮が見えてきたので、中を散歩してみることにした。境内には、神主さんにカメラを向けるイタリア人の団体や、お土産にお守りなどをもとめるアメリカ人の団体などがいて、自分も海外の観光地にいる観光客の一人のような錯覚に陥った。

東京から北九州に戻った翌日、英語教育についてのアメリカ人の先生の講義を聞くために大阪に行った。講義の行われる部屋に入ると、福岡で同じようなテーマのセミナーがある時に会う、顔なじみの人達が何人もいることに気付いた。ここでもまた、自分がどこにいるのか見失いそうになった。

この一週間、朝目覚めると、自分がどこにいるのか一瞬わからなくなることが何度かあった。それは、友人達と飲み過ぎたワインによる二日酔いのせい、というより、短時間のうちにあちこちと動き回ったことによるものだと思う。矛盾するようだが、その「自分がどこにいるのかわからなくなる感じ」は不安感とは程遠く、「どこにいても私は私」という信念のようなものに近く、動き回れば動き回るほど、その思いは強くなるように思う。

交通の便が良くなることによって、物理的な距離はますます小さくなり、情報通信の便が良くなることによって、物理的な距離が小さくなったような感覚をもたらし、そんな感覚、あるいは距離を越えようとする意志によって、物理的な距離はますます縮まっている。

4月1日、斜め後ろの席のアメリカ人の同僚に「春休み、ソウルと東京と大阪に行ったのよ。」と韓国海苔と虎屋の季節限定の桜の羊羹と近畿限定抹茶コロンを渡した。日本に来る前、韓国で英語を教えていた彼は「予め知ってれば、ソウルのおいしいお店を教えてあげたのに。」と残念がる。しばらくして、ウェールズ人の同僚も話に加わる。彼は、日本での仕事が終わったらウェールズのカーディフで食べ放題の居酒屋を開くと張り切っていたのだが、先日出張のため訪れた東京をいたく気に入って、一旦イギリスで MBA を取得した後、また日本に戻ってきて東京に住むのが夢だと言う。「大阪に行くついでに、京都にも行ったの？ 京都には、お気に入りのアイリッシュ・パブがあるんだけど。」とアメリカ人の同僚。するとウェールズ人の同僚は、「アイリッシュ・パブよりも六本木のクラブのほうがカッコイイよ！」と言う。しばらく、美味しいお酒や食べ物のお話で盛り上がっていると、「門司で世界中の美味しいビールを飲ませる店を見つけたんだ。」とアメリカ人。今月はなんとかいうドイツの美味しいビールが入荷されるらしい。「今度、みんなで行こうよ！」「賛成！」遠い未来のことだと思っていた「地球村」に、気がついたら自分が住んでいた。そんな思いを強くした一週間であった。

ニュースでは連日、イスラエルとパレスチナの血なまぐさい争いが報道されている中、なんとも能天気なことだと、少し後ろめたい気持ちにもなる。けれども地球村に住む一員として、隣人と美味しい食事を楽しむことも大切なことだ、と少し言い訳がましく思ったりする。そんなことを考えていると、初めてアメリカでホームステイした時のことを思い出した。初めて訪れた異国で、ホストファミリーはとても親切にしてくれた。一緒に食べたおいしいピザや、ぶどう畑の広がるカリフォルニアのソノマをドライブしたことは今でも楽しい思い出だ。その時「将来、彼らの国と争うようになるのは嫌だな。」と思った。そして「こんな思いが世界中にはりめぐらされれば、戦争もなくなるのかな。」と思った。子供らしい理想主義ではあるが、私は今でもこの気持ちを大切にしたいと思う。友人達の国とは友好的な関係でありたいと思うし、もしそうでなくなるような動きがあれば、自分に何ができるのか考えたいと思う。そして、学校では、生徒たちがこんな気持ちを体験できる場を提供したいと思う。

今年度、私の勤務する高等学校は、「インターネットによる国際交流推進校」に選ばれた。今年度は、イギリスのリーズにある中等学校と交流することにした。まず手始めに、自分の国の高校生の生活を映像と言葉で報告しあおうという計画だ。この交流で、生徒たちが、いや、自分自身も含めて、どんな友情を築き、どんなことを学んでいくのか楽しみだ。

4月26日から、北九州から韓国のウルサンへの高速旅客船が就航する。韓国語に堪能な同僚が「週末はウルサンでカルビ！」ツアーを計画しようと言っている。「近くて遠い国」だった韓国が、ますます「近くて近い国」になっていく。

* Dean C. Barnlund. *Public and Private Self in Japan and the United States*. Tokyo: Simul Press, 1975

[目次へ](#)

ペナン&ランカウイのバカンス

山 田 昌 子

私の小さな夢・・・と言えば、青い海を見ながら、また夕日を見ながらポーっとすること、そこに冷たく冷やされたビールや赤ワインがあったら最高だなあっていうこと

だ。と、言う、「常にバタバタしている山田がポーっとする事なんか出来ないよ！」と言われたり、「やっぱり山田やな、アルコールは手放せないんやなあ?!」って笑われたりする。人が何と言えど、私は、5年程前にアメリカの南端キーウエストでそのとっても贅沢なひと時の味をしめてからは、またいつか「あれ」がしたいと思い続けて来た。今回思いがけず、実現した。飯田さん、丸野さんとペナン・ランカウイ（マレーシア北部の島々）に3泊5日（機内泊1）旅したのだ。（News A 4月号に関連記事あり）

岡田さんの学校で1年間留学生として学んでいたシバちゃんを紹介していただき、ACROSSの夏期セミナーの御協力をお願いし、話をした後、私たちは観光に出かけた。彼女の名前は知っていたが、何故か勝手にマレー系だと思っていた私は、初めてシバちゃんに会った時、自分の愚かさを思った。インド系マレーシア人で、明るい元気な学生だった。しかもたった1年間しか日本に滞在していないにもかかわらず、日本語が堪能（勿論英語も上手い）腰が低く、相手に合わせて話ができる優秀な学生だった。タクシー運転手をしているお父さんも優しい方で、私たちが滞在しているバトウ・フェリングからジョージタウンまでは車で3、40分かかると、タクシーを回してくれた。

「お昼御飯は何が食べたい？」

「インド料理は？」

「（シバちゃんとお父さんを見て）うん、それがいい！」

お父さんは、ジョージタウン近くの道沿いのインド料理食堂に連れて行ってくれた。私は、辛いものが大好き。しかも、シンガポールのリトルインディアで、バナナの葉をお皿に、地元名物のカレーやブラックペッパーを使った蟹やヘッドフィッシュ（註）を食べ、マレー料理が大好きだった。車の通る道路沿いに並べられたトレイから、カレーで黄色くなった鶏や魚をとった。フィッシュヘッドカレー（スープ）も注文した。特に、土鍋にはいったフィッシュヘッドカレーは、様々な香辛料やハーブが入り、とっても美味しかった。暖かいスープが学年末のせいで疲れている胃を優しく包んでくれるような感覚があった。香辛料やハーブのお陰で、食べ終わると胃がスーッと始めた。私はインド料理を食べた後のこの爽快感が好きだ。シバちゃんとジョージタウンまでバスに乗りコーンウォリス要塞に行った。胃腸がずっと気持ち良かった。

が、ちょっとばかり効き過ぎた。次第にお腹がおかしくなってきた。フィッシュヘッドカレーの香辛料のせいだと思う。モンゴルでもネパールでも中国でも、全く大丈夫だ

ったのに、生まれて初めて海外で腹痛を経験することになった。コンドミニウムの32階にあるペントハウスのロマンチックなベッドの上で、身体から力が抜け、何故か熱っぽく、周期的に訪れるお腹の痛み。ふらふらエネルギーなくトイレに立つ時、クーラーの爽やかな風、窓から見えるペナンの青い空と海のハーモニーが慰めだった・

ウトウトしていたのだろうか、人の声がした。丸野さんと飯田さんが帰って来てるんや。時計を見ると2時間以上が経過していた。身体は・・・？お腹の痛みは消えていた。もう大丈夫や・・・。リビングに歩いていくと、丸野さんが振り返った。「外に出られる？夕日に間に合ったね！」一緒にバルコニーに出ると、昼間の蒸し暑さはどこへやら、海風が肌に心地よかった。32階から見えるペナンの小さな街は少し暗くなっていた。空は少しばかり曇っていたが、青い海に小さな夕日がオレンジ色に輝き、その色が少しずつ少しずつ海を染めていった。赤くなるにつれ、周囲は青く黒くなる。夜の戸張が来る前の、そう、線香花火が最高に燃える、あの瞬間のようだった。私はしばらくそこから離れられなかった。辛い2時間が、この風景ですっかり消えてしまった。

ランカウイでも海が見たかった。予約時、よい部屋は工事中で宿泊できないと聞いていたが、実際フロントに交渉してみると、島内唯一の(マレー様式の)水上シャレーに泊まることが出来た。どうも工事が遅れているらしい。海の上に建てられたコテージ(エグゼクティブ・スイート)は、木で造られており、中に入ると落ち着いた色彩の、洗練された英国風の家具が整っていた。スイートだから、キッチンもリビングも広い。お茶を湧かし、バスケットの中のトロピカルフルーツを切る。海に突き出したバルコニーに出ると、ライトブルーの海が眼下に広がり、遠くに白いビーチが見える。派手な色の小さなヨットが1艘漂っていた。このバルコニーは、手すりや床、軒下が黒茶色で統一されていて何処となく落ち着く。その上、1日中陽があたらないように作られており、白いテーブルと椅子だけでなく、寝転がれるデッキチェアがある。私たちは、入室するやこのバルコニーでくつろいだ。横になり、足も腕も伸ばす。ノースリーブのブラウスからヌーと出た肩が熱帯の空気に触れる。サンダルを脱いだ素足が清しい。気がつくと、私は身体を海風に身をまかせ、眠ってしまっていた。飯田さんも、丸野さんも同じ。このほんの数分が心地よかった。

よく冷えた缶ビールをグラスにつぎ、ただボーと海をみつめた。気温が高いため、数

分過ぎるとそのビールも温くなる。だから、ついつい温くなる前に飲もうとして量が増え、飲み過ぎてしまう（単に飲む言い訳をしているだけだという声も?!）。私の前の白いテーブルに缶ビールが4本並んだ。

人間、時にはこのような時間も必要だ。走り続けるばかりでは身体が疲れてしまう。日常生活ではできない、ビーチの日陰で寝転がったり、白い砂の上で透明の小さな蟹や淡い色の貝を探すのもいい。私たちが泊まったホテルのプライベートビーチは遠浅で、ちゃぷちゃぷ浮いているだけでも楽しかった。が、バカンスを楽しむのに、海外のビーチに行くばかりがいいとは言わない。日頃忙しい現代人の生活だからこそ、非日常を楽しむ、そんな時間を私は楽しみたいと思う。3月末夢がかない、自然から再び走り続けられるようなエネルギーをもらい、私は、また新たな1年にチャレンジしていきたいと思っている。時として疲れた時は、脛に焼き付いた海や空、夕日を思い出したい。

（註）漁師たちが、漁で残る魚の頭を食べ始め、美味しかったので、地元の料理となったと聞いたことがある。が、ある本にはインドのケララ州からシンガポールへ来た料理人によって再現されたと書いてあった。



[目次へ](#)

タスクプロジェクト報告会終了

事務局 小 関 静 枝

3月28日東京でタスク報告会が行われました。詳しい報告は4月12日に会員にはメールで送付しましたのでそちらをご覧ください。皆様半年間お疲れさまでした。

報告会ではこの半年を振り返るとともに今後の e-dream-s の活動をどう進めていくのかをこの報告会で確認できました。

このタスクというのはテーマは与えられていますが（本当はテーマも出てくればいいのですが）それを実現するための計画、実行方法などは自分たちで考えていかなければいけません。形がきまっていれば楽ですが、それはタスクとは言えないのでしょう。

報告の後の話し合いで以下のような方向でタスクを継続していけるのではないかとということが出されました。

- 1) アーカイブ利用実践報告 ・ ・ 小中高すべてで報告が必要
報告はアーカイブのページに載せる。
- 2) 写真収集 ・ ・ ・ インターネット、写真クラブ両方で行う。
ギネスブックに登録できるぐらいの枚数を目指してはどうか。
- 3) HP 作成 ・ ・ ・ e-dream-s の紹介、アーカイブからのリンクページの充実
NPO 団体に基準にあうもののリンクも考えられる。
- 4) 助成金応募 ・ ・ ・ 助成金がまとめられた本がある。応募様式を作り、とにかく
たくさん応募し、資金を得る必要がある。

* メンバーの募集方法、実施時期等については後日連絡を差し上げます。

最後になりましたが、報告会を準備して下さった志村先生、阿部先生そして東京支部の皆様ありがとうございました。

[目次](#)

タスク報告会を終えて

阿部 武司

アクロス東京支部の春の合宿が3月27・28日に予定されていた。その合宿の中でe-dream-sのこの度のタスク報告会を行なうという。開催に関わる準備は当然のこととして東京に住まう理事の志村洋子先生と私に任せられました。正直に申し上げて IT に対しては敬して遠ざけている感のある二人には最初から荷の重いタスクだな、と感じていました。でも今は、あのタスク報告会は東京で開催されるべくして開催されたものなんだと合点しています。

IT に関する知識が皆無に近い私が何とかお役にたてたとすれば、それは全くの僥倖に近いものでした。プレゼンテーション用にCPとプロジェクターを調達した私でしたが、辻先生から、「パワー・ポイント、ありますか?」と言われてそれが何のことやらさっぱり理解できなかった程のテイタラクでしたから(実は、私めの関知しないところで既に私のCPにインストールされていたのです)。いま思えば、私のための報告会でもあったと言えます。ありがとうございました。

東京で報告会を開催したのは成功だったと思っています。e-dream-s の、特に写真アーカイブ事業の現状と課題が東京の会員に直接肌で感じ取ってもらえたと思うからです。それぞれの会員が自分の守備範囲というか攻撃目標を捉える機会になったものと思います。<これから先どこまでもタスクは続きます>。ですから、問題は次に如何なる報告会が持てるか、だと思います。それを東京の仲間に意識してもらえたと思っています。志村先生もおそらくその点は感じておられるものと思います。皆様の足手まといにならなければ良いかと思いつつ、初体験の報告とします。



代表理事による基調講演



グループ代表者による発表を聞く参加者



発表後の話し合い



反省会は本格台湾料理

編集後記にかえて～東京出張～

報告会のために東京へ行く。大阪の都会に住む私だが、「東京へ行ける」となると、少しうれしい気持ちになった。事務局の小関さんと一緒に新幹線に乗り込んだ。会場は、東京駅から山の手線に乗り、新宿駅で乗り換え、練馬駅から徒歩約10分。駅周辺は商店が立ち並び、賑やかだったが、歩いて行くと非常に閑静な住宅街に入ってしまった。会場の周辺の満開の桜並木を通り抜ける時には、思わず歓声をあげた。

タスク報告会はスムーズに進められた。各グループの報告者は、取り組んできたタスクについて報告するために、いろいろと準備をしてきている。私は、CDに保存して会場のコンピューター（阿部さん所有）を使い、プロジェクターに映して報告をした。（このために、今まではなかった、CD-RWを購入しました。）自分のしたことをこのように報告することが出来て、本当によかったと思っている。いくら仕事をして、人に見せて聞いてもらう機会がなければ、なんだかやりがいがないものだから。私も、他の報告者の発表を聞きながら、そのタスクに費やされた時間と労力を知ることができた。

「タスクは人のためならず」と言う。私は、今回のタスクの中で、ホームページを作るソフトの使い方に慣れることができ、CDに保存することを覚え、東京に行くこともできた。その晩は、楽しい東京の夜を満喫し、次の日は、丸野さんに「春爛漫の東京」を案内していただいた。（この場でお礼を申し上げます、ありがとうございました。）

e-dream-s の発展とともに、自分自身も進化していきたいと思う。

[目次へ](#)

e-dream-s 編集担当 田辺恵

美